

私語辭典

790
420
CONNAISSANCE
DES TEMPS
Unfamiliar Keys ● India ● Lie ● Gossip ● Fortuneteller ● Women ● Men ● Raise ● Newswriter

POUR L'AN X.
AVEC
les additions.
Teacher ● Shoes ● Marriage ● Crown Prince ● Liquor ● Shyness ● Stark Naked ● Sexual Desire

柳美里

Vulgar ● Eat ● Breasts ● Wife ● Telephone ● Lechism ● Names ● Escape ● Confidentiality.....

Yu Miri

A Private Glossary

私語辭典

Unfamiliar Keys • Lull • Lie • Gossip • Fortuitous • Women • Men

Raise • Nostril • Teacher • Sin • Marriage • Crouch • Sin

Liquor • Synthesis • Starch • Nihil • Sexual Desire • Vulgar • Glands • Breasts

Wife • Fellowship • Lesbianism • Nerves • Teeth • Confidentiality.....

柳美里

Au Miri

朝日新聞社

柳美里（ゆう・みり）

一九六八年、神奈川県生れ。横浜共立学園高等学部中退後、東京キッドブラザースを経て、八八年、青春五月党を結成。

九二年、『魚の祭』で第三七回岸田國士戯曲賞受賞。著書に『静物画』『向日葵の柩』（共に而立書房）、『魚の祭』（白水社）、『グリーンベンチ』『柳美里の自殺』（共に河出書房新社）、『家族の標本』（朝日新聞社）、近刊予定に『フルハウス』（文藝春秋）がある。

私語辞典

一九九六年五月一日 第一刷発行

著者 柳 美里

発行者 川橋啓一

発行所 朝日新聞社

編集・書籍編集部 販売・書籍販売部

〒104-11 東京都中央区築地五-三-二
電話・〇三-三五四五-〇一三一（代表）

振替・〇〇一〇〇一七-一七三〇

印刷所 大日本印刷

©Yu Miri 1996 Printed in Japan
ISBN4-02-256970-0 C0095

定価はカバーに表示してあります

目次

あ

あいかぎ【合鍵】

……7

インド【印度】

……11

うそ【嘘】うわさ【噂】

……15

えきしや【易者】

……19

おんな【女】おとこ【男】

……23

か

かう【飼う】

……27

きしや【記者】きょうし【教師】

……31

くつ【靴・沓】

……35

けっこん【結婚】

……39

こうたいし【皇太子】

……43

さ

さけ【酒】……………47 しゅうち【羞恥】……………51 すっぱだか【素っ裸】……………55
 せいよく【性欲】……………59 ぞく【俗】……………63

た

たべる【食べる】……………67 ちぶさ【乳房】……………71 つま【妻】……………75
 でんわ【電話】……………79 どうせいあい【同性愛】……………83

な

なまえ【名前】……………87 にげる【逃げる】……………91 ぬすむ【盗む】……………95
 ねこ【猫】……………99 のる【乗る】……………103

は

は【歯】……………107 ひみつ【秘密】……………111 ふたり【二人】……………115
 へい【塀】……………119 ぼうし【帽子】……………123

ま

まくぎれ【幕切れ】……………127 みみ【耳】……………131 むいちもん【無一文】……………135

めんかい【面会】……………139 もうそう【妄想】……………143

や

やきゅう【野球】……………147 ゆき【雪】……………151 よくぼう【欲望】……………155

わ

ラーメン……………159 り【利・離】……………163 ルンペン……………167

れい【霊】……………171 ろうか【廊下】……………175

わかれ【別れ】……………179

あとがき……………183

装幀・亀海昌次
力バー写真・白谷達也
本文挿画・安久利徳

私語辭典

あいかぎ 【合×鍵】

ある種の男性は女性への最高の贈り物と錯誤する。妻が夫のポケットから発見した場合は錯乱。

映画「フィラデルフィア」に出てくる弁護士が口癖のように、「四歳の子どもにもわかるように説明してくれ」という。そう、言葉を子どもにもわかるように説明するのは至難の業だ。例えば「愛」とは何かを誰が四歳の子どもに説明できるだろうか。辞書を引くと、こう書いてある。

へあい【愛】①かわいがる。いとしく思う。
うつくしむ。いたわる

①から⑤ぐらゐまで記されているのだが、ぴんとくるひとはいないのでないか。愛とはへ血を流すほどに他者に係わることである」という定義もありうるのだ。辞書には人生がない。

それで私の「私語辞典」を作ろうと思ひ立つた。

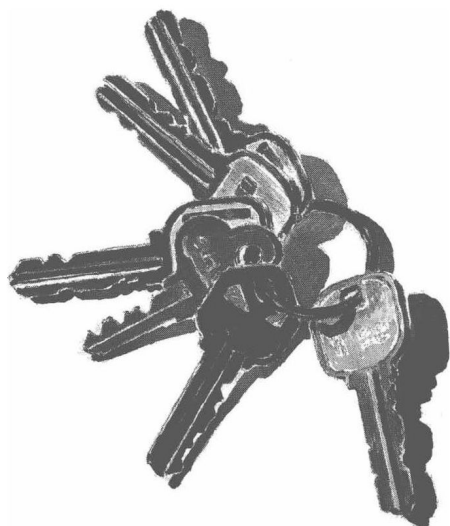
私は高校を中退した十六歳のときに、ある劇団の研究生になった。鎌倉から稽古場に通っていた私は、つい面倒になって、都内の同じ研究生の部屋を泊まり歩いた。風呂のないアパートが多かったので、布製の黒いボストンバッグのなかに石鹸、タオル、歯ブラシ、シャンプー、リンスを常に入れていた。閉店間際に銭湯を出て、コンビニでジュースやスナック菓子や漫画週刊誌などを買い込み、扉のブザーを鳴らす。

彼女たちは私に合鍵を渡してくれていた。下着や洋服の替えを置いてある部屋は十近くあって、その数だけ合鍵を持っていたわけだ。

バイトをしている彼女たちの帰りをぼんやりテレビを眺めて待っている。そして彼女たちが帰ってくると、何を話すというのでもない、愚痴を聞いたり噂話をしたりしてひとつしかない布団にもぐりこみ、彼女たちの髪や肌の匂いを嗅ぎ、鉢の柔らかさを掌や背中に感じながら眠る。明け方、「ウーン、アックン」などと誰かと間違えられてしがみつかれたこともあった――。

だから合鍵というと、居候、一宿一飯というイメージがある。

二年ほどいた劇団を辞めると、彼女たちの部屋に居づらくなってしまった。



私は一生定住できないのではないかと
思うほど、流浪が性に合っているような
のだ。深夜まで呑んで、つい男性の部屋
に泊めてもらい、成り行きでずるずると
二泊、三泊したりすることもある。

その男がある日ふいに、

「これ作つといたよ」とキーホルダーの
先に鈍く光る鍵をぶらぶらさせる。

そんなとき、私はどうしたらいいかわ
からなくなるのだ。その男は口笛を吹き
ながら会社に出勤する。私はしばらく部
屋で過ごした後、鍵をかけて外に出る。

渡された合鍵をポケットのなかで弄び
ながら歩いていると何だか無性に腹がた
つてくる。二度と泊まるもんか、私は流

あ

浪の民だ。
たみ

そう思っても鍵は棄てられず、現在私の部屋には二、三十個の合鍵が使い古しの百円ライターと一緒に置いてある。困ったものだ。

アメリカでは人口の二、三倍は拳銃が出まわっているそうだが、日本の人口の三倍は合鍵があるに違いない。だからといって、別に、文句はない。

インド【印度】

仏陀、ネール、ガンジ
ー、サイババなど、日
本人につきつぎと信仰
の対象を供給する、渾
沌と神秘の国。

小さいころ、私の家では林檎りんごといえは
印度林檎だった。ごつごつしていて水気
は少ないが、固い歯ざわりと、蜜の多さ、
そしてなにより臙脂えんじに近い赤暗色が好き
だった。しかしなぜかあるときから、ぱ
ったり見掛けなくなった。ふじ、紅玉、
陸奥、陽光、印度林檎を捜して果物屋の
棚を眺めるのだが、どこにもない。

一口齧かじるたびに、目をしょぼつかせた
老象の、長い鼻で林檎を口に運ぶ姿が臉
に浮かんだ。エキゾチック——、マンゴ
ーやパパイヤより強く異国を感じる果物
だ。

ついさつき広辞苑で「印度林檎」を引
いてみると、へ北米インディアナ州の



と書いてあり、がつくりした。インディアナのインドだったのか。

随分前に観たのではっきり憶えてはいないが、「インドへの道」というデビッド・リー
ン監督の映画は、印度の洞窟に男と女が迷い込んだとき、女が強姦されたと妄想を抱き、
裁判に訴えるというストーリーだったと思う。洞窟に木霊する声だけの男に犯されるとは
まさに印度だからリアリティがあるのだ。

小学校五年、六年と、私立の女子校を受験するために学習塾に通っていた。

そのころは、我が人生最悪のときといってもいいくらいに、小学校ではイジメに遭うし、
父と母は別れるしで、私の周辺は荒涼としていた。塾だけは大丈夫だと思っていたのだが、
途中から同じ学校の女が入学してきて――、地獄になった。

授業中、前の机と後ろの机で鉢を挟まれたり、消しゴムを髪にまぶされて、

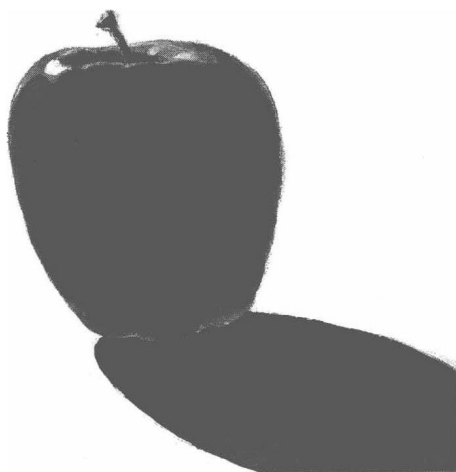
「ふけだらけ、きたない」

と騒ぎたてられたり、白いワンピースを着て行くと、

「わざと透ける服を着て、先生に色目つかってる」

と数人に押さえつけられてスカートを頸のあたりまで捲りあげられたり、トイレに行っ
ている隙に弁当や参考書をゴミ箱に棄てられたり、とあげていけば限りがない。

い



目立たないことだけを考えて保護色を
探す虫のように教室の隅にいたのだが、
イジメはエスカレートしていき、彼女た
ちは平気で髪の毛やセーターを鋏で切つ
たり、コンパスの針で腕を刺したりする
ようになった。

私をイジメたのは全員女である。

私は算数が全く駄目で、塾の模擬試験
では毎回二点とか五点（もちろん百点満
点で）などという成績しかとれなかった。

小学校六年の夏休み、先生は、

「特訓してやるから、授業がはじまる二
時間前においで」

と階段の途中で囁き、

「可愛いワンピース着てるな、印度更紗インド更紗

い

だから涼しいだろ」

私のワンピースの裾をたくしあげた。

外の暑さと蟬の声から遮断された冷房のききすぎた教室で、A先生は私の耳に複雑な分
数の掛け算や割り算を呪文のように囁きながら私の下腹部に手を這わせた。

私は呆けたように空を視凝めた。じつとりと汗ばんだ背中に印度更紗が貼りつくのを感じながら――。